第八八回　東洋文化講座（二〇一五年一一月九日）

遊牧モンゴルの現代的課題

窪田新一

窪田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日いただきましたこの機会にお話し申し上げたいのは、現在のモンゴルが抱えている課題の紹介です。その課題が実は遊牧をやってきたモンゴルであるがゆえに抱えたまま、なかなか解決できないという状態に苦しむモンゴルについてご紹介申し上げられればと考えまして、こういう題名にいたしました。

若干自己紹介をさせていただきますと、先ほど幾つか拙著の紹介がありましたけれども、もともとモンゴルの農地開拓の歴史が博士課程で研究しておったテーマでございます。中国の内モンゴルに留学しまして、帰ってまいりまして、そういう研究をやり始めたころにベルリンの壁が崩れまして、いわゆるモンゴル経済の専門家を外務省あるいはＪＩＣＡで求めるところとなったわけです。けれども、残念ながら社会主義のモンゴル経済を研究している研究者はいらっしゃったのですが、そうではない、要するに純粋にモンゴルの経済を研究する研究者というのはいなかったようです。で、外務省もＪＩＣＡも困って、何かそれに近いことをやっている者はいないかというので、私にお鉢が回って参りました。以来一九九一年からずっとそのＪＩＣＡ、外務省のお手伝いをしてモンゴルの経済発展のために及ばずながら支援のお手伝いをするということをやってまいりました。その現代的課題という話をいつも外務省やＪＩＣＡの皆さんと議論しているわけであります。

この写真をちょっとごらんいただければと思います。これは冬のモンゴルです。ごらんいただいている白いのは雪です。寒く乾燥しているので、雪はいわゆるアスピリンスノーといいますか、さらさらの雪です。

これはモンゴルのウランバートルの郊外ですけれども、ウランバートルというのは盆地でございまして、その盆地の山の斜面に向かって、これは今どんどんウランバートルへ引っ越してきた人たちの住居がふえていくところの様子がわかる写真です。こっちのほうは遠いのですけれども、だんだんふえ始めているところです。

これは囲っているのですが、何のために囲っているのかというのが一つ問題になるかと思うのですが、二〇〇二年に土地所有法という法律ができました。それまで社会主義でしたから、当然全ての土地は国有だったのですが、その土地の所有をモンゴルの国民に認めようという法律が施行されました。一九九二年にできた現在のモンゴル国憲法でも土地の所有を認めるという条文があります。それに基づいてつくられた土地法です。それまでモンゴル人は土地を所有したという歴史的な記録はないのです。草原は草原としていわゆる入会地（いりあいち）として使われましたから、ここの入会地におまえら勝手に入るなという、その支配に関する抗争というものはあったのですけれども、この線を引いたところの土地の所有は俺のものだという所有の概念はなかった。それを二〇〇三年から施行しまして、国民全員に分配しました。草原自体は分配していません。

ウランバートルの土地をもらった人とそれこそ草原のど真ん中の土地をもらった人というのは大きな違いがあります。例えば地方都市の自分が住んでいるところの土地を、「あなたはここに住んでいるのね。じゃあ、ここをあげますよ」というので、地方ですと膨大な土地ですね。〇・五ヘクタールくらいくれる。〇・五ヘクタールですと、日本でいうと専業農家としてはやっていけないのですけれども、兼業農家なら〇・五ヘクタールお米をつくってまあまあやっていけるくらいの広さで、結構広いのです。牧場としてなら、十分な広さです。そういう土地を国民全員に分配しました。

そうすると、ウランバートルのこの土地を持っていたほうがいいに決まっていますよね。東京と、私は石川県の今は白山市になっております田舎の出身なんですけれども、田舎の田んぼと東京の土地あるいは、埼玉の土地であれば、都心に近いほうがいいに決まっています。それはウランバートルでも同じで、みんなこうやって囲ってはそこを自分の土地と主張するようになりました。西洋史の用語でエンクロージャー、囲い込みという言葉がありましたけれども、ウランバートルでは、人々は自分の土地を囲い込んで自分の土地と主張するということが始まって、それが今

も続いています。

モンゴルの人口は、三〇〇万を超えました。二〇一五年の一月に三〇〇万を超えたのです。統計資料ですと二九九万何千人と載っているのですけれども、漸く三〇〇万を超えました。覚えやすいので三〇〇万と言っています。ウランバートルに人口がほぼ半分、正確な統計というか、統計局が出している統計では一三七万人と出ているのですけれども、実際はそれよりも二〇万人くらい多い一五〇万人を超えていると新聞では報道されています。つまり、国民の半分がウランバートルに来て、自分の土地を広げて広げてウランバートルに集まってきているという、そういった状態になっています。

ゲル（モンゴルの移動式住居）がたくさん集まっている地区があります。内モンゴルでは、パオ（包）と言います。こっちは「だんだんゲル」だけです。こっちのほうに来ると建物になっています。最初はゲルで来て、建物を建てて定住していくという、そういうのが見てとれます。こういうふうになっているのがゲル地区と呼ばれるところです。いいところはなくなって、急な斜面の、どんどん悪いところになっていっている状態です。

ゲル地区というのは、電気はかろうじてありますが、水がありません。さらには下水も全くありません。トイレは昔懐かしい、我々が子供のころ使っていたトイレです。あまり深く掘っていないので大変です。水は買いにいかなければいけない。水を買いにいっているのが子供です。

こういう一輪車が結構きれいにつくってあって、ちゃんとポリタンクに水を入れて、運ぶのが子供たちの仕事になっています。これがさっき言った囲い込んでいる塀です。モンゴルの塀はこういうふうになっています。何でこういうふうにするのか、よくわかりません。すごく高くするんですね。見えなくして、防犯上でしょうか。

では、経済環境をちょっと押さえようというので、これはホームページその他で確認できることで、改めて言う必要もないことが多いのですけれども、一四年の成長率は七・八％です。その前の年は一二％でした。その年、二〇一三年は、モンゴルの経済成長率が世界最高だった年です。一四年は七・八に急に下がったことになります。中国経済の減速が原因です。モンゴル経済は完全に中国に依存しているのです。中国への原料供給国として、その経済成長は中国の経済成長にほぼ引っ張られていると言って過言ではありません。

二〇〇八年以来というのはリーマンショック以来ですね。経済成長率が一〇％―二〇〇八年はさすがにそんなに大きくなかったのですけれども、それでもプラスですね。経済成長率は一〇％前後で、非常に高いのです。一人当たりのＧＤＰは四三二〇ドル。これは世銀の数字です。一人

当たりＧＤＰが四〇〇〇ドルを超えるというのはいわゆる最貧国から脱却したという基準になります。四〇〇〇ドル以下の国が最貧国として、例えば日本の援助、ＯＤＡでいうと、人道支援ではなくて無償で援助をしていく基準というのは四〇〇〇ドルなんです。モンゴルは四〇〇〇ドルを超えています。

したがって、もう日本はモンゴルには無償援助はしないのです。いわゆる円借款はあります。貸して利子をつけて、二・五％か三％のソフトローンで、二五～三〇年の長期貸し出しをする可能性はあります。ちなみに内モンゴルの一人当たりのＧＤＰは一万ドルを超えており、日本は三万ドルを超えています。

「鉱物資源開発に伴う成長」について話します。鉱物資源開発そのものではないということに注意してください。開発に伴う成長、あるいは成長率ということです。鉱物資源によって発展しているかというと、そうではないのです。その鉱物資源―例えば銅、金、銀、蛍石、モリブデンが売れ筋ですが、それを売って、その利益で大きく経済発展しているのではないということです。ここを掘るともうかりそうだというので、その土地を先に買っておこうというので、ドーンとその周りの土地を買います、そこにいく道路を買いますという、いわゆる外国投資とその周辺の建設―道路などの建設ですが、そういうものによる経済発展であります。

ロシアの名前が出てきましたけれども、ロシアにも依存しているということです。エネルギーは、石油はとれるのですけれども、石油精製能力がないので、自動車の燃料などは全部ロシアからの輸入なのです。ガソリンは一〇〇％石油製品として輸入しているのです。原油は中国に輸出しています。パイプラインがないのでタンクローリーで送ります。大慶油田、ぐるっと回って大慶まで持っていって精製しているようです。

工業分野については、一二年のことですけれども、一四・八％と成長率が非常に大きかったので、ちょっと書きました。さらに、びっくりマークをつけて乳製品！としました。モンゴルだから、乳製品は当たり前じゃないか。何でびっくりマークがついているんだと疑問に思って頂きたかったのです。小生は内モンゴルに一九八三年から八六年まで三年いたのですけれども、そのときも内モンゴルのバターというのは上海製とかいわゆる先進地域のものしかありませんでした。内モンゴル製のバターはなかったのです。乳製品はある、乳もあるし、何でもあるのですが、それを加工するいわゆる産業や市場が未発達だったのです。我々はヨーロッパのさまざまな乳製品の高いものを知っています。例えば羊のチーズ、ヤギのチーズ、余り出ない、たくさん出ない乳のチーズとかは希少価値があるので高い

のです。モンゴルは何千万と家畜がいて、牛も羊もヤギもたくさんいるのに、特に最近はヤギがむちゃくちゃふえているのに、その乳は利用されないまま、赤ちゃんヤギだけが利用しているという状況です。

それがようやくこの年になって加工ヨーグルト、パックの生乳が出てきました。この生乳が出てきた理由は、ご記憶がありますでしょうか。中国でメラミン事件がありました。タンパク質のメラミンを入れて、赤ん坊たちが次々に病気になるという大変な出来事がありました。そのメラミンがたっぷり入った乳をモンゴルは中国から輸入していたのです。もう本当におかしなことなんですけれども、その矛盾がきょう話すテーマの一つでもあります。モンゴルはそういうたくさんある原料が活かされないまま存在しているのです。それが途上国たる所以でもあります。

繊維工業は毛織物、カシミヤ織物が盛んです。ただし、カシミヤも今は自分がそのカシミヤのセーターをつくって、カシミヤの毛布をつくって輸出するのではなくて原毛の輸出に変わりました。カシミヤはヤギの産毛、絨毛を集めてきて、一頭当たり一五〇グラムぐらいのカシミヤ原毛が取れます。物によりますけれども、マフラー一本とか人によってはセーター一枚とか言いますけれども、一頭のヤギからとれるのはそれくらいです。

かつて、すごくカシミヤが高かったのをご存じでしょうか。セーター一着一〇万円とかイギリス製のものとか、日本製でも五～六万円のものとかがあったのをご存じだと思うのですけれども、大量生産するようになって、例えば量販店で最近は七〇〇〇円ですが、昔は四〇〇〇円とか、三〇〇〇円とか、そういうカシミヤのセーターを販売していた時期があります。それはみんな大量生産のおかげで安くなったのです。大量生産をしたのは、三井物産が内モンゴルでオルドスという会社と合弁してはじめました。民族系で最初に上場した中国のオルドスという会社です。モンゴルでは、伊藤忠がつくったゴビコンビナートが初めです。この二つの会社が最初のカシミヤ大量生産の会社です。両方とも三井物産と伊藤忠という、日本の商社が関係してカシミヤの国際価格を大変動させたのです。でも、おかげでモンゴルの遊牧民にとっては現金収入が増加しました。羊は毛全体を毎年ばんばん刈ってたくさん出ますから安いのです。でも、価格競争ではオーストラリアの羊毛に勝てないので、モンゴルや内モンゴル製の羊の毛が日本では出てこないのです。日本の羊毛はみんなオーストラリア、ニュージーランドのものです。

金偏の工業生産は確実に増加しています。銅、金、銅がとれれば金も銀もとれるそうです。とにかく銅が出てくるところから金も出てきます。亜鉛、モリブデン、蛍石、石炭。

石炭はまだ国際入札もできていなくて、操業も全然いつ

になるか見通しが立っていないのですけれども、世界最大の炭田の建設中が注目されています。炭田といっても露天掘りですから、ただすり鉢のように掘っていくだけですけれども、タバントルゴイ（五つの山、峰）の炭田が世界最大の炭田になるとされています。露天掘りで良質の無煙炭が出るようです。いわゆる燃料炭ではなく原料炭として製鉄に欠かせないので、中国はのどから手が出るほど欲しいとされていたのですが、最近中国の経済が減速してきて、ちょっと微妙になってきています。いずれにせよ動いています、というのが石炭の開発状況です。

国際価格の変動による貿易収支の変動は、銅の国際価格の上がり下がりで、モンゴルは一喜一憂しています。ほとんど国家予算の六〇％ぐらいがエルデネット銅山の売上によって賄われていた時期があります。昔のブラジルのコーヒーは余りにも古い例ですが、値段が上がってブラジルの経済が動いていました。同じようにモンゴルも銅の国際価格によって貿易収支が変動します。一つのものに依存している経済は脆弱なものです。

石炭がふえているというのは、中国はモンゴルを有償援助し、その援助の借款をバーターによって支払う契約にしています。例えば建物をつくる、道路をつくり、その代金のかわりに石炭をください、亜鉛をくださいというので、それが石炭採掘の大幅増に結びついています。それは先ほどのような大きな炭田ではなくて、小さく石炭を採掘しているという状況が多く見られます。

農業分野です。農業分野はこの数字を見ても、結論として言いますと、社会主義時代にロシアが農耕をモンゴルに教え、いわゆる国営農場をつくりました。その国営農場は小麦をつくって、あるときはソ連に小麦を輸出したりしていたのですけれども、ベルリンの壁が崩れて社会主義体制が崩壊して、その生産量が著しく落ちました。それが今だんだん上がってきて、今は完全に自給できるようになり、三〇〇万人の人口を養うだけの小麦の生産ができるようになりました。

一体どこでつくっているのかというと、実はウランバートルの北側です。この穀物作付け面積が今ふえています。ただ、生産性はすごく低くヘクタール当たり一・三二と、内モンゴルは五・三ですから、その四分の一ぐらいの生産性しかありません。要するに小麦は出てくるのですけれども、中に実が入っていない、スカスカのものしかできないのです。でも、自給できるところまで来ました。

家畜頭数は二〇一三年の数字で四五〇〇万頭で、国民が三〇〇万人ですから、三〇〇万人が四五〇〇万頭、一人当たり一五頭ぐらい持っているという計算です。市場経済移行後、ずっとどんどんふえています。

穀物は三八万トン、ジャガイモ、野菜も二〇〇六年の数

字と比べていただくと両方ともすごくふえているということがわかると思います。農業生産がふえてきたということになります。

貿易は、貿易赤字が二〇億ドル。総額一〇六億ドルですから、そのうちの二〇％が赤字というすごい赤字なんです。輸出が四二億ドルで、その差は足し算するとわかりますけれども、その輸出の中に占めている鉱物が九〇％、銅の精鋼は五〇％銅のもので、純銅ではありません。純銅にする技術はすごく難しくて、きれいな純銅にすれば、例えばコンピュータにそのままつながって、純銅にした瞬間に値段がすごく上がります。銅の精鉱は五〇％なので製造に使えず、もう一回精製しなくてはいけないので、その値段が全然違います。「もう一歩やればモンゴルの収入はすごくよくなるのに、どうしてやらないの？」と言ったら、「モンゴルはそんなに工業発展しなくてよい」といわれました。社会主義の世界分業というのをご存じかと思います。モンゴルは羊をつくってください、牛の肉をつくってくださいという世界分業が一つありました。地下資源の銅があるので銅を採掘を始めますが、銅の製品にして付加価値の高いものにするのはカザフスタンの役割でありました。モンゴルの銅の精鉱をカザフスタンに持っていったのでした。今は中国がみんな買っていて、モンゴルの産業発展に結びつくまで入っていません。

でも、五〇％だけ銅なんですけれども、残りの五〇％の中に金など他の鉱物がたっぷり入っているのです。今はその金などの部分をちゃんと中国に売っていることになっているのですけれども、他人事ながら非常に心配です。少なくともソ連時代は残りの五〇％は全部不純物ということでモンゴルは大損していたからです。知らないということはそういうことなんです。

輸出は九〇％以上が鉱物で、さらにその九〇％は中国向けです。輸入は六三億で、中国が三三％、ロシアが二九％。ロシアの二九というのは石油製品です。

最近の傾向は、機械製品、自動車の輸入が増えています。ウランバートルはすごい渋滞です。日本車率がすごく高いです。恐らく五割を超えていると思います。でかいランドクルーザー、パジェロが好まれ、そういう系統の車ばかり走っています。レクサスのランドクルーザーなんて日本では余り見ないですけれども、ウランバートルでは黒の高級なランドクルーザーをよく見ます。ああいうものでないとだめだそうです。若者は、日本ですと結婚してマンションを買うとか家の購入にいくんですけど、モンゴル人は車の購入にいきます。

自動車や機械機器を輸入し、日用品も多くを輸入に依存しています。自分でつくっていないのが現状です。象徴的な例が紙です。モンゴル製の紙はまだ歴史上存在していま

せん。建築バブルはまだ続いています。まだ続いているというのは、民主化してからずっと建築はやり続けられています。二〇数年間ずっと建築バブルが続いているのです。数年で住宅価格が数倍になっています。集合住宅を建設し、そのため国債を発行しました。これがややこしい問題になりそうです。チンギス債というやつです。ギリシャと同じようにドル建てで販売していますので、当然ドルで返さなければいけないのです。ですから、もしモンゴルに返すドルがなければ、ギリシャと同じように国家倒産が予測されます。二〇一七年から返済が始まりますので、そのときモンゴル経済がどうなっているか、心配されています。そのときは善意のお金持ちの日本が当てにされるのは間違いがありません。人口三〇〇万人、インフレ率一一％、失業率七・九％という数字は随分よくなった感がありますので、心配しているのは日本人研究者だけかもしれません。

古い時代、チンギス・ハンの歴史はきょうは抜きで、近現代史を話します。一九一一年辛亥革命で清朝が倒れます。そのときにモンゴルは独立宣言しました。外モンゴル（モンゴル国は外モンゴル、外蒙に相当します。）は独立宣言したのですけれども、結局一九一二年中華民国外蒙自治政府として高度な自治が認められた地域になりました。これはロシアが働きかけて、独立を認めさせようとしましたが、ロシアが孫文、その後袁世凱（えんせいがい）の圧力を受けて、独立承認を取り消し、中華民国外蒙自治政府となってしまったのです。活佛政権と書いてあるのは、そのとき誰をトップにするかということで、いわゆる国民統合の最も合理的なやり方で、チベットのダライ・ラマのような存在で、モンゴルではジュブツェンダンバ・ホトクトという活佛がいるのですけれども、この活佛をハーンとする自治政府ができました。内モンゴルも同じように独立しようとしたのですけれども、結局できなくて、辛亥革命の前のままでした。内モンゴルは、内モンゴルの諸侯をなだめるために孫文の三民主義をかなぐり捨てて、いわゆるモンゴル貴族の権益をそのまま認めました。したがって、中華民国も内モンゴルとチベットに対しては封建制度をそのまま残していました。

その封建制が完全になくなるのは、一九三一年九月一八日の満洲事変で日本軍が入って、モンゴル貴族の特殊権益を全て否定するところから始まります。一九一七年にロシア革命があって、そのときに赤軍と白軍の内戦がありました。白軍のフレー（ウランバートルの当時の呼び名）侵攻で、モンゴルにロシアの白軍が入ってきました。さらにその白軍を追い出すために中国の段祺瑞（だんきずい）の部下で徐樹清という将軍がきて白軍を追い出します。そのまま中国軍閥は一九一七年一二月からウランバートルに残ります。つまり辛亥革命で中華民国の自治政府になったのに、

その自治を白軍が壊してしまって、さらにその後白軍を追い出して中国軍閥がそのまま残ったので、結局辛亥革命前の清朝と同じように、中国の直接支配を受けてしまう状況になってしまいます。

それでは我慢できないということでソ連のコミンテルンに持ちかけて、コミンテルンが一万人の赤軍を送って、ウランバートルを奪還してくれました。それを一九二一年のモンゴル人民革命と呼んでいます。人民革命というのは中国軍閥を追い出す戦争だったのです。そのときは活佛政権だったのですけれども、一九二四年活佛が亡くなって、一九二四年憲法ができて、モンゴル人民共和国が成立しました。世界で二番目の社会主義国です。一九二五年には内モンゴルに人民革命党ができたのですが、内モンゴルの独立や解放はありませんでした。

一九二九年、中華民国蒙蔵委員会が成立しておりますが、それは二〇一二年まで台湾にずっと蒙蔵委員会がありました。私も台湾の蒙蔵委員会を訪ねていって、蒙蔵委員会の人たちと中国語やモンゴル語で話をしました。今は大陸委員会の中の蒙蔵処という部門になりました。それまで中華民国の蒙蔵委員会が外蒙・内蒙の全ての行政事務を取り扱っていたことになっています。

一九三一年が柳条湖事件（満洲事変）で、その後一九三四年に毛沢東が内モンゴルの民衆に呼びかけて、人々を共産党のほうに呼び込むため、「ソヴェート民族政策」という提案をします。外交権以外はほぼ自治を約束していたのです。内モンゴルの人々はそれを信じたと言っています。国民党も同じような勧誘政策を提案します。一方、一九三九年には蒙古連合自治政府ができます。

この年ノモンハン事件がありました。モンゴルではそれをハルハ河戦争といい、いわゆる軍国主義者を排除した戦い、国を守った戦いとしてハルハ河戦争を大きく歴史に残し、今も子供たちはそういう歴史教育を受けています。戦後賠償というのは、サンフランシスコ平和条約において、連合国側は損害賠償を請求しないということになっており、日本は外交上戦後賠償していないのですけれども、無償援助という形でモンゴルに五〇億円払っています。この五〇億円で先ほど言いましたカシミヤの工場、ゴビコンビナートをつくりました。ただ、合弁でも何でもなく、モンゴルの会社ですけれども、そのプラントを輸出したのは伊藤忠で、工場はユニチカのものでした。

一九四五年に日本は敗れ、モンゴル、シベリアなどの強制抑留が開始します。モンゴルにも一万数千人の強制抑留された我々の先輩たちがいました。そのうち約一〇〇〇人の方が二度と故国日本の土を踏むことができませんでした。一万数千人の中で一〇〇〇人なくなったことは、ほかのシベリア抑留と比べてどうなのかとかいうのはわかりま

せん。どう評価するかというのも難しいと思います。でも、その先輩たちが残してくれたものが今もしっかりと残っています。政府庁舎（国会議事堂）、外務省、オペラ劇場、証券取引所などの一一の大きな建物を建てました。それまでは二階建ての建物は一つもなかったところに、日本軍の、強制抑留されていた我々の先輩がつくった建物が今もしっかりと存在し、尚且つしっかりと利用されています。ぜひウランバートルに行ったら、元のお墓（現在は記念モニュメントがあります。）に行って、先輩たちの労苦を思いやっていただければと思います。

一九七二年二月二四日、日本とモンゴルの国交が樹立されます。その年七月、日中国交正常化が実現しますが、モンゴルのほうがちょっと早いのです。戦後賠償、無償援助が一九八一年に完成し、一九九〇年に民主化が始まります。アメリカとの協調援助というのは日本とアメリカの協調援助のことであります。一九九二年にモンゴル国憲法が制定され、現在に至るということになります。

日本との関係は、先ほどの人口のところで申し上げるのを忘れてしまったのですけれども、遊牧モンゴルというときに、では、今遊牧民はどれくらいいるのかという疑問をお持ちになるのではないかと思います。遊牧民は今九・七％です。さらに言えばＧＤＰに占める牧畜分野の割合もそれくらいです。日本はもう全然農業は数％にも満たず、少ないのですけれども、モンゴルはまだカシミヤの原毛を輸出していますので、それがある程度を占めています。その人口九・七％の遊牧民、もうちょっというと内モンゴルは農民がいます。漢民族は農耕していますので、その農耕民と遊牧民を合わせた数字ですが、第一次産業、農牧業に従事している者は内モンゴルでは二二％います。つまり、遊牧モンゴルというとき、少なくともモンゴルには九％ぐらいは遊牧民がいるんです。さらにさっきのウランバートルに人々がどんどん集まってきているというのを見れば、地方の生活と都会の生活に格差があって、だから、三〇〇万人のうちの一五〇万人が、ウランバートルに集まってきています。もともと社会主義時代にもウランバートルには四〇万人くらいはいたのですが、それでも一〇〇万人の増加、多くの人が地方から来て、どんどん近郊に住んでいるということは、それはいろんな意味のある数字と考えます。つまり、その地方の生活と都会の生活、ウランバートルの生活と草原の生活の格差が大きい、あるいは存在したままであるということです。

日本はそういうモンゴルに対して援助をしているわけです。一九九一年から二〇一三年までのＯＤＡはこういう数字になっています。総額二三八六億円を国民一人当たりは三〇〇万人ですから、割り算をすると結構な数字がモンゴルに行ったことがわかります。私たちの税金であります。

日本の援助について、その特徴といいますか、忘れたらいけないことがありますので、それを一つだけご紹介したいと思います。

モンゴル支援国会合というものがありました。全部で一〇回やりました。一九九一年から二〇〇三年までですね。開かれなかった年もあるので、こういうことになっています。六回まで、九一、九二、九三、九四、一つ飛んで九六、九七ですね。以上東京開催。モンゴル支援国会合といえば日本だ。そしてカンボジア、アフガニスタンの復興支援をやっている。一回は日本でやったりする国際会議はありますけれども、ずっと六回続けて東京でやった会議というのはない。さらにいうと、この支援国会合は世界銀行と日本が共同議長国として各国に呼びかけて開催していた会議であります。つまり、日本が世界でイニシアチブをとって外交的に主導的な役割を果たした唯一の国際会議ではないかというのが私の話です。これは既に朝倉書店の講座「世界の地理」第九巻「東北アジア」で私が紹介しております。

七回目はウランバートル、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）があるパリは八回目、九回目ウランバートルでやって、一〇回目は東京で最後の支援国会議をやりました。

以後、技術会合とわざわざ書いておいたのですけれども、これは実務者会議なんですね。Technical Meeting という英語を外務省の人が公電で「技術会合」と打ってしまったので、外務省の文書上は技術会合と言わなければいけないそうで、僕はずっと嫌味を言い続けているのです。どう考えても実務者会議と訳すべきだと思いますね。その後、開かれているドナー会議の時期を含めて、日本はモンゴルに対して相変わらず最大の援助国です。しかし、今は、中国がモンゴルに対して援助というよりは、合弁、投資額が大きくなっているので、日本の援助は全く目立たなくなっています。世論調査ではモンゴルにおける、今後大切なパートナーとして、ずっとアメリカ、ロシア、三位が日本だったのですが、中国のそのような支援のほうが大きくて、今は中国のほうが三位に位置づけられ、大切なパートナーとして評価されるようになってきています。

日本がイニシアチブをとってモンゴルを支援してきたということ、さらにいえば特別な関係もありますよということで、日本は今後一〇年間の日本モンゴル基本行動計画を二〇〇七年二月にエンフバヤル大統領と安倍さんとの会談で確認しました。一〇年間私たちはこういうことで同じ道を歩みましょうという約束をしたのです。外交上一〇年分もそんな約束をやっちゃったのです。何でこんなことをやったかというと、前の政権のときに安倍さんが掲げていたのは、今も言ったりしていますけれども、「戦後レジームの修正」というものです。その一つとして、国連安全保障理事会の常任理事国グループ入りを目指しました。国連

改革を目指しました。結局失敗して、日本はそのままいくと安全保障理事会の非常任理事国の場もなくなって、泣きっ面に蜂みたいな状況になるところで、その立法権をモンゴルは日本に譲ってくれました。結局そのときは順番があって日本は非常任理事国になれなかったのですけれども、安倍さんはそのときのモンゴルの申し出に物すごく感激して、この一〇年分の基本行動計画の確認につながったのではないかというのが小生の見方です。新空港建設（三〇〇億円の援助）というのがその産物です。

日本は全有償資金協力中二一％、無償資金協力中五〇％というのは、ぬきんでてモンゴルを援助してきているといえます。

在日モンゴル人留学生数は、この数字はおおよそです。出所は大使館などで、二〇一三年の在日留学生は一五〇〇人、技術協力の枠組みによる来日者は延べ二五〇〇人、モンゴル在留邦人が四三九人です。青年協力隊とシニアボランティア両方で延べ三八九人。これはもう四〇〇名を超えているでしょう。在留モンゴル人は五七〇〇人います。もちろん鶴竜、白鵬も含めてです。

日本の戦争責任の果たし方と国際社会における地位みたいなものを考えるときに、戦後賠償を無償援助として一九七四年の段階で早く合意できたというのはとても大きいのではないでしょうか。モンゴルはその当時まだ社会主義国でしたから、ソ連の言うことを聞かざるを得なかった国ではありましたけれども、早く日本との戦争責任の解決をみたというのは大きな意味があると考えています。それは、アジアにおける戦後処理の未完状態を考えると、日本とモンゴルの間での戦後処理という問題は非常にうまく解決できたのではないかというのが小生の評価です。また、日本がイニシアチブをとって支援国会合をやったということも、日米同盟という軍事同盟の下では、とても珍しいことと考えます。

日本はご存じのように中国に対して特にそうだったのですが、あるいはアジアのほかの国々に対してもそうだったように、いわゆる有償資金援助、円借款の支援が日本の援助全体を通して見られる特徴です。つまり自助努力を促す援助をするというのが日本の援助の一つの特徴と言われています。その中でモンゴルに対しては無償資金援助が多かったのです。自立への道支援というのは今後もモンゴルに対する日本の援助の課題だろうと考えられます。これまでは不十分だったと思います。

対中国依存度を高めるモンゴルの現状は、これはもうしようがないと思います。モンゴルの地下資源を日本もかつては買っていました。銅などを買っていました。でも、中国が日本の一・五倍か一・三倍の値段をつけて買っちゃうんです。それは高いほうに売りたいに決まっています。だか

ら、中国が買い続ける限り日本はモンゴルから地下資源を輸入することは難しいでしょう。ただし、世界最大の炭田が稼働し始めれば日本はモンゴルから中国を通って出てくる無煙炭を天津港から日本に輸入するということが可能になるかもしれません。今日本のある商社がモンゴルの石炭を中国に売るというのをやっています。商売というのは何でも成り立つのですが、何故日本の商社なのでしょう。対中国依存度を高める貿易というのは今後もずっと続くと思いますが、モンゴルの商社がモンゴルの石炭を中国に売るのは実現しているようで、必ずしもそうではないようです。

六カ国協議とモンゴル外交を考えると、例の北朝鮮をめぐる六カ国協議というものがありますけれども、モンゴルは入っていないのです。でも、六カ国協議の中で北東アジアの安全保障や安定を議論するときは、モンゴルを入れてほしいというのがモンゴルです。一生懸命日本のためにもやってくれていますよ。安倍さんが行っては、問題解決に向けた協力を依頼しているかどうか知りませんけれども、モンゴルは一生懸命日本の拉致家族の問題について仲介の労を取ろうとしています。その一つの意味は、北東アジアの安全保障の話をしているのに、どうしてモンゴルをはずすのかとモンゴル外交筋はそうわかりやすく言っています。モンゴルのプライドは高いのです。

遊牧民がいてまだ地方と格差があるということで、ちょっと考えなければいけないということを幾つか書いています。多分一番最後の話のこの辺がポイントになると思います。

モンゴルは一九八七年、まだペレストロイカの真っ最中に（モンゴルではペレストロイカと言わず、オオルチロルト　シネチレルと言っていました）、いわゆるペレストロイカ、いわゆる開放政策を始めていたころ、ドゥゲルスレンという外相が日本に来て、帰国後Look Eastではないけれども、「日本に学べ」と当時の人民革命党の機関誌にそれを書きました。小生はその当時ちょうど内モンゴルから一九八六年に帰ってきたばかりで、一九八七年から日本の大学の非常勤講師をやるようになるのですけれども、「ウネン」という真実という意味の党の機関紙にこれが出たのを本当に感動して読みました。昔はアメリカ帝国主義の手先の日本は何とかと、そんな文章しかなかったのですから。小生は一九七五年に東京外国語大学のモンゴル語学科に入るのですけれども、そのころの教材って、その「ウネン」の社説とかで、それには日本人なんか誤った道に進む、本当に愚かな人間みたいなことしか書いてないのです。そんなイメージでした。その新聞に「日本に学べ」というのが出たのです。僕はすごく感動した記憶があります。

一九八七年当時、Look Eastの話をしますと、マレーシアにしろ、東南アジアの諸国は「日本に学べ」を実行しま

した。それをドゥゲルスレンもそのまま言ってくれたのですが、実行のほうはどうでしょうか。アジアＮＩＥｓは経済発展します。韓国、台湾、シンガポール、香港が経済発展を遂げたときの話です。それでモンゴルもそれを目指そうとしたのがこれです。一九九〇年二月というのは、一九八九年一一月はベルリンの壁が崩れたのですが、その約三カ月後、ソドノムさんというモンゴルの首相が来日しました。この方は今もモンゴル日本友好促進協会の会長をやられるなど親日家です。彼は日本に来て、第二次大戦後、モンゴルで命をなくされた、強制抑留をされた人たちの名簿を持ってきて、そのときはテレビの放送は余りなかったのですけれども、テレビのカメラの前で数分間にわたって、おわびの姿勢を示しました。その後、実はエリツィン大統領も来て、彼もやるのですけど、ソドノムさんが先にやっていたのです。ソドノムさんは後に、一九九五年の阪神淡路大震災があったときにカシミヤの毛布を持ってきて、インタビューを飛行機の中で受けました。関空というのは駐機料が高くて、その当時モンゴルは払えないからというので給油してからすぐ帰りますということでした。簡単に言えば、社会主義から民主化するころのその当時のモンゴルの指導者たちは日本に学びたい、日本との関係を強くしたいと考えていた気がします。それに日本が応えて支援国会議のイニシアチブをとることになったということです。必要と支援がちょうどいい相互関係ですね。日本が果たした役割というのは今申し上げましたけれども、民主化後のモンゴルの経済安定政策にとって日本の援助は欠くことのできないものであったといえると思います。

私は実は一九九一年からＪＩＣＡや外務省の手先をやっています。ＯＤＡ評価で日本の対モンゴル援助評価をやるグループが立ち上がります。ＪＩＣＡの仕事をやりつつその評価の仕事にも声がかかって、実は二回日本政府はモンゴルに対する援助評価をやっていますが、二回とも私はその委員としてメンバーになりました。まさに自画自賛なんですけれども、自分も参加している援助を評価してきました。援助評価の報告書が出ていますけれども、両方に名前が載っているのは恥ずかしながら私だけです。その両方で小生は先ほど言いました日本の外交の独自性がないとか何とか結構外務省とのやりとりではいろいろときついことも言っているのですけれども、客観的に評価して（したつもりで）、モンゴルにとってその日本の援助がこの二五年間非常に有効に作用してきたということは確信を持っていえます。これは日本のＯＤＡがなかったら、モンゴルの今の経済成長というのでしょうか、それがいいか悪いかは別として、それはなかったと思います。経済発展の基礎を築くのに貢献したと、そういう評価を小生はしています。

問題はここからです。モンゴルの経済的自立は可能かと

いう点です。日本の援助を評価しても、その中でモンゴルの現状を考えてやってきたことだとしても、無償の援助が多すぎたのではないかという反省があります。ちゃんと返済義務を負う円借款のほうがよかったなというのはあります。一人当たりＧＤＰが四〇〇〇ドルを超えてからモンゴルに対する援助は全て有償に切りかえましたので、今後はよくなっていくと期待されます。モンゴルの経済発展、インフラ整備に我々の税金が無駄になることは減っていくことが期待されます。無償だったので無駄もあったと考えられます。

経済的な自立をするためには、モンゴルが自ら目指さなければ自立はあり得ません。我々が幾ら自立しなさいと言っても、自分で自立しようとする気がなければだめです。では、自立するためにどのように現状を評価して、どのようにそれを促進していくか、あるいはそれを支援するかが課題になります。ものづくり人材育成とか、技術協力とかいろいろあります。いずれもモンゴル側にやる気がなければ、あるいはやる気はあるけれども、具体的な実態が伴わない。これが現実だと思うのですけれども、それをどうやって乗り越えていくかです。モンゴル側はどう体制を整えていくか、具体的に行動していくか、その課題は今最も大きいと思われます。

産業振興の方向性はまだ形成されていないと思います。建設ブームのおかげで、都会に行けばいろんな仕事があります。特に建設労働等の仕事はあります。二〇年前に比べて失業率は減ってきています。改善されたという数字は間違いありません。人々の実感も伴っていると思われます。建設労働に関して一つだけおもしろいエピソードを話しますと、今も中国人労働者は結構多いのです。建設現場で働いているのはモンゴル人よりも中国人の労働者のほうが多いとされています。内モンゴルの一人当たりのＧＤＰは一万ドル、中国全体では七〇〇〇ドル、モンゴルは四〇〇〇ドルであります。でも、中国自身が中国国内の格差を大きく持っているので、まだ貧しい農村の出稼ぎ労働者、農民工たちは、北京や上海もいいけれども、ウランバートルのほうがいい金になるからといってウランバートルへ来るのです。今一番重宝されているのは北朝鮮からの労働者ですけれども、中国人が来てよく働いてくれているというのは事実のようです。実はモンゴル系の建設会社が中国人を雇うようです。モンゴル系の会社の人ほどモンゴル人は役に立たない、あの人たちは信用できないから、モンゴル人よりもちょっと高くても中国人を雇う、というのが今の現状だそうです。

モンゴルにも階段があります。こういう大学の階段では、上り下りに非常に気をつけなければいけません。電気がちょっと切れているとか、今停電は少ないのですが、暗

いというのもあります。そうではなくて、階段の一段一段の高さが全部違うのです。これが俺のやり方だとか言って、妙なところに自己主張をする人たちの仕業だそうです。必要のないと言ってはいけないんですが、彼ら「遊牧民」のアイデンティティはそういうところに出てきていると考えています。だから、朝青龍が出てきたり白鵬が出てきたりするのかなと、それに結びつけてしまうことも可能かもしれません。格闘技はむしろそうでなくてはならないのでしょう。

やはり、きちんとした階段をつくる建築基準のルールはちゃんとあるんです。法律はちゃんと整備されているのです。経済的自立はモンゴル人なら一〇〇人が一〇〇人その必要性を強く説くことでしょう。でも、自立は階段の高さにおいてできても、ルールを守らせることにおいてはできない。そんなことをやっていて自立なんかできない。自分で自分の管理ができなければ、実は遊牧もできないはずです。遊牧も産業としてみれば、高度に管理された農業技術の積み重ねによって成り立つ産業です。今は、モンゴル人がモンゴル人自身を管理できない状況になっているのではないでしょうか。今は、モンゴル人が中国人の言うことを聞いて管理が成り立っています。嘗てはソ連人のいうことを聞き、次は世界銀行やＩＭＦのアメリカ人、ちょっとだけ日本人、これがモンゴルの一つの原理です。いざとなれば遊牧があるので、表向きはよく言うことを聞くが、本心は隠したままにする、階段の高さは一様にすることが正しいと復唱することができるのです。遊牧民は、歴史上もそうだったとされています。押せば引き、引けば押してくる、それが遊牧民の戦い方でした。それが処世術になってしまったのでしょうか。

ニンジャと片仮名で書いてあるのは、ハリウッドのアニメ映画の「ニンジャ」からきています。映画に登場するカメさんは、背中に甲羅があって、立ち上って人間のようにしゃべったりするのです。その格好にすごく似ている人たちがモンゴルにいるので、その人たちのことをニンジャと呼んでいます。いわゆる非合法砂金採掘者です。こうやってゆすったら、金は重いので下に出てくるので、上のほうをどけると砂金が残ります。その人たちはその砂金選別用のたらいを背中に背負って歩くので、ニンジャと呼ばれるようになった。ニンジャたちが多いときは一〇数万人いました。ウランバートルに国民の半分が集まっている国で、それ以外の残りの一五〇万人の中での一〇数万人が砂金掘りをやっていたのです。ニンジャたちはそうやって遊牧民と同じように、こっちの砂金、あっちの砂金とうろうろしているのです。今は非合法ではなくて合法にして、許可証を持てば砂金掘りが許可されます。そのかわり、収入に見合う税金を払えというので、逃げ回っているニンジャもま

だ多くいるようです。税金を払いたくないですから非合法のままでいいという人たちがいて、これもその矛盾のまま存在しています。

オルガルヒ、ご存じでしょうか。いわゆる寡頭支配とか少数の貴族による独占というふうに訳されています。貴族政治のときに使われたりする言葉です。アフリカ諸国の矛盾とか格差を言うときに使われたりします。アフリカは遊牧とか、焼畑農業とかをやっている人たちがいて、自給自足している人たちがいます。一方で、コンゴであるとか地下資源がたくさんあるところは、一部のヨーロッパで教育を受けた酋長というか部族長、そういう人たちの一族がその地下資源の採掘権を外国のメジャーに売って、その一部の人たちだけがその国の経済を動かしています。あるいはその国で豊かな人たちは一部の人たちだけで、あとはいわゆる狩猟採集生活をやっているか、遊牧をやっているのです。貨幣経済とは関係なく存在している人たちは、劣悪な衛生環境のまま生活しているともいえます。だから、この間のエボラ出血熱がなかなか収まらなかったりするわけです。そういう格差がそのまま存在しているとき、その格差の恵まれている、お金持ちたちのことをオルガルヒと言います。モンゴルも大体一〇〇〇人ぐらいと数はわかっているようです。一〇〇〇人くらいのオルガルヒがモンゴル経済をコントロールしているといわれます。これが実は社会主義のときの利権を上手に確保して、アパートや不動産を早めに自分の名前に書きかえたり親類の名前に書きかえたりして、その不動産の転売でもうけた人たちでもあります。中国もやっぱり不動産売買が経済発展を大きくした要因です。その不動産がこういう一部の金持ちをつくり出し、今はこの人たちは不動産と株式を動かしているのです。一般国民はその株主になることも余りできず、オルガルヒたちがモンゴルの経済を動かしています。

もう一つの経済上の問題点は、いわゆる腐敗ですね。賄賂、汚職がはびこって、アメリカと世界銀行はとうとう頭に来て、汚職追放キャンペーンをやれというので、今の大統領になってから国会で関連の法律を通し、汚職追放に関する法律だけではなくてさまざまな委員会をつくったりしてやっているのですけれども、現実はそんなにきれいになっていないようです。汚職がはびこっているのは、一つはさっき言った不動産関連ですが、もう一つは地下資源関連です。地下資源採掘権というものがあります。一番最初一九九一年、九二年のころは一平方キロメートル当たり一ドルで物すごく安かったのです。今はもうとんでもない値段になっています。要するに大体石炭の上に国土全体があるような国ですから、どこかを掘れば必ずなにか出てくるのです。つまり地下資源採掘権というのは非常に重要な不動産の譲渡可能な有償の権利です。不動産を持った土地の

所有者は、操業はしなくても、採掘権はそうやって売買ができます。それがちゃんと出てきて株式になったりすればいいのですけれども、石油採掘権市場というので完全に公開されているわけでもないのです。言い方は悪いですけれども、かつての大相撲の親方株と同じで公開されていないのです。どこかではすごい値段で売買されているのですけれども、我々はお相撲の親方株を買ったりはできないのです。同じようなことがモンゴルではその地下資源採掘権で起きているわけです。一部の人たちがみんな買い占めて、不正を国のトップがやっていたようです。特にエンフバヤルという前の大統領が自分の親族にそのような利権を与えて汚職で逮捕されました。最後まで暴れまくってガードマンたちと一緒になって警察と対立して、あわやマフィアの抗争のような、そういう抵抗を前大統領がやっている姿がユーチューブに上がっています。腐敗は大統領までやっているのですから、中国と同じというか、全員が腐敗していたと考えていいでしょう。それを腐敗と呼ぶか何というか難しいです。それで「オルガルヒによる政治的、経済的支配？」と書きました。

もうお気づきかと思うのですけれども、これが現代的な課題です。復習してみますと、モンゴルは、中国とロシアという二つの大国との等距離外交をやらなければいけないのです。アメリカ、日本、ドイツなどと「第三の隣国」政策、つまり、二つの隣国のどっちにも過度にインボルブされないため、コミットされないようにするために、アメリカ、日本、ドイツなどの第三の国々を重視します。モンゴルは国境をロシアと中国にしか接していないので、第三の隣国というのは政策上の話です。私たちのことを第三の隣国と呼んで重視して、中国やロシアと等距離外交をする政策を、全方位外交というふうにもちろん言えると思うのですが、そうではなくて「第三の隣国政策」というのが特徴を表していてわかりやすいと思います。

アジア諸国との関係強化を「多角的外交」としています。これはＡＰＥＣとかそういうところにモンゴルはどこにでも出ていこうとしているのです。また、モンゴルは国全体の非核宣言をしています。国連総会で非核宣言をしています。モンゴルの国全体です。日本は何とか町とか、村単位で非核宣言をやっていますけれども、国全体でやっています。たとえアメリカ軍の基地がウランバートル郊外にできたとしても国全体で非核宣言をしていますから、そこには核兵器を持ってくることはできないと言っています。国連ではそういう演説をしました。宣言をして、国連総会でも満場の拍手でもって歓迎されています。

国際機関、援助国からの、特に日本の支援を重視する政策を採り続けています。色のないお金が必要なのです。日本は本当に先ほど言いました国家的な援助を、一〇〇％と

までは言えないですが、日本には珍しく国を挙げて、国の政策として、モンゴルへの援助をしてきました。そのかわり、日本に優先的に何かくれと言ってもいいくらいだと小生は思うのですけれども、そういうことは一言も言わずに、ただひたすらモンゴルの人たちのために支援してきています。日本に対する評価は高いです。かつては大統領が就任演説のときに日本の援助に対する感謝の意を表明しておりました。それはちょっと特異なくらい、日本に対する謝意の表明でした。最近は何となく中国のほうが大事になってきたのですが、それでも苦しいときに援助してくれたのは日本だということを、大統領や首相、来日する人たちはみんな知っているし、言葉にすることもそんなにはばかることはありません。よく言ってくれているし、理解してくれているといってよいでしょう。

一九九七年バガバンディ大統領訪日時、「日本とモンゴルとの共同声明」における「総合的パートナーシップ」の確認です。今は二〇一〇年に現在のエルベグドルジ大統領が来たときに「戦略的パートナーシップ」が確認されました。この戦略的パートナーシップと総合的パートナーシップの何が違うかというと、同盟の一歩手前の関係というのが戦略的パートナーシップです。同盟関係ではないけれども、より強い関係であるということを示すために使われているのが「戦略的パートナーシップ」という言葉だそうです。

二〇一五年二月に日本・モンゴルＥＰＡ（経済連携協定）が締結され、署名されています。日本も国会で批准しました。例えば一九九一年に海部さんがサミットでモンゴル支援を表明したとか、小渕さんが訪中してから訪モしたとか、小泉さんが何回も行った話とか、歴代の首相は必ずモンゴルを重視しています。二〇一三年七月にエルベグドルジ大統領が東京に立ち寄って、安倍さんは自宅に大統領を招きました。これはモンゴル側は本当に感激していて、事あるごとに言われました。大統領は去年経団連でスピーチしました。それとともに習近平、プーチンがモンゴルに行って、モンゴルへの援助合戦というか、モンゴルを取り込もうと日本も加わって引っ張り合っています。

一九九〇年以降日本は、モンゴルの民主化や市場経済への移行支援に大きな役割を果たしました。一九九九年小渕さんの文化支援も大きな意義がありました。日本文化センターをつくったのは小渕さんです。今も立派な建物がありますけれども、その前に中国がでかい建物を建てて、本当に見えなくなってしまうらしいです。

二〇一〇年以降はモンゴルの高度成長の時期です。実体経済の未開発状態は続いています。地下資源が売れて、モンゴルのＧＤＰが成長しているのではなくて、その先行投資、周辺に対する投資がモンゴルのＧＤＰの数字を上げて

いるわけで、実際にモンゴル製の何が売れて経済発展しているのかというと、かつてのカシミヤのセーターとかのほうがよく出回っていた気がします。今はもう原料で多くが中国に流れていって、モンゴル製の製品は多く出まわっていない状況です。地下資源にせよ、そういう工業製品が世界市場に出ていく状況になっていないのも事実です。

地下資源は自分たちの国を豊かにするために欠かせない、今モンゴルが豊かになるためには地下資源で利益を上げなければしようがないということで、今オユトルゴイという大きな銅山の開発が進んでいます。最初はカナダのアイバンホーマインズという会社がやり始めるのですけれども、モンゴル側は最初の計画を二転三転させていわゆる利益が出たらその利益の何％という、最初は五％だったものを一〇％に上げて、一〇％で足りなくて三〇％まで上げるという状況になりました。もう、それではやれないということでずっとストップしたままでいたら、アイバンホーマインズというのも住友金属くらい大きな会社なんですけれども、もう動かなくなってしまって、アイバンホーマインズを今度はリオ・ティントというオーストラリア・イギリス系の、住金の一〇倍くらいの大きな会社が今は銅山の開発を運営しています。簡単にいえば、資源ナショナリズムに突き動かされたモンゴルが、二転三転させて自分の取り分をふやそうとしているのです。国際機関や外国企業はもう二度とモンゴルに対して支援しない、関わらないというようにほとんどなりかけました。そんなに契約を次々に変える計画はあり得ないとして、諸外国から厳しい批判を受けて政策と国際協調の狭間にいると思います。

今ジグジッドという鉱山大臣をやっている人物は小生の教え子です。東京外国語大学時代に私が教務補佐をしていたときの学生なんです。日本大使をやっていて、戻って、今は大臣です。もっとも親しく話ができる中なので、いろいろ話しました。そうせざるを得ない、つらい立場だと認識しています。

資源ナショナリズムを無理に通して、海外のまともな会社は来なくなってしまうという矛盾があります。そのために実体経済として地下資源を普通に売って、その利益でまたどこかの設備投資をやって、産業を発展させるというような当たり前のことができていない状況です。資源ナショナリズムは、当然、マイナスだと思うのですけれども、そうせざるを得ない、いわゆる人気がなくなってしまって政権が倒れてしまうと元も子もなくなるわけです。ポピュリズムとその政策の矛盾というのが今もずっと続いたままなのです。矛盾の上に乗って、オルガルヒによる、少数の独占による経済支配あるいは政治支配がこれからもしばらく続くでしょう。

遊牧モンゴルの発展は、まだまだです。民主化して二五

年もたったわけですから、民主主義のルールに従って、そのルールをきちんと守っていけるはずです。階段は一つ一つ同じ高さの段にして、一つ一つの段が違う高さにする必要は全くないのです。遊牧モンゴルは発展途上段階で、遊牧民はそういう文化がなかったということを言いわけにしているのではないだろうかという疑問が確信に変わりつつあるのが、最近の小生の実感です。これが「遊牧モンゴルの現代的課題」という題に込めている卑見です。

言いわけは何にでもくっつき、理屈と膏薬も何にでもくっつくのです。モンゴルはそうやって遊牧という世界に浸っていました。我々もずっと「水草に随いて遷る」という漢文を読んで、そう思ってきました。でも、実は匈奴も、鮮卑も農耕をやっていたという記録もあるのです。私たち日本人は、その遊牧民匈奴、遊牧民鮮卑、遊牧民モンゴルというイメージで東洋史を学んできました。小生は東洋史を学んだ人間ですので、学んだ背景を実感しています。現実はちゃんと中国人がしっかりとモンゴル人が農耕をやっていた、五穀を播種していたことを記録として残してくれています。違う人間、違う文化、違う人たちの歴史を理解するときに、ああ、遊牧民はこうなんだということをまずイメージとしてつくり上げることは大事だったと思います。しかし、それだけではありません。モンゴルが産業社会をつくって現代に至るまでを考えて見ましょう。この何千年の歴史をつくり上げて来る際に、そのモンゴルがどのような産業育成を行ってきたのか。それはイメージの問題ではないでしょうか。民族のイメージと民族のありようの特徴と、実際に行われてきた産業育成は別に考える必要があるのではないかというのが、東洋史を学んできた小生の深い反省であります。

そして、モンゴル人にやっぱり申し上げているのは、モンゴル人は豪快なのが好きとか、朝青龍や白鵬の強さを見ると格闘技的なものに対する、強い憧れがあります。男の三つの競技というのは相撲と弓と乗馬なんですが、これができなければ男じゃないみたいなイメージがモンゴル人の中にはあります。牧畜地に行って遊牧民の姿を見ていますと、男はふだん酒を飲んで全然働かないのです。女の人は朝暗いうちから起きて乳を搾って掃除して何して、すべてを女性がやっています。そして子供たちもよく手伝うのに、男は何もしないのです。モンゴルの遊牧民の男は全員単なるアル中だと思っていると、一つだけ大変役に立つことがあるのです。馬ならしです。モンゴルの家畜は家畜ですけれども全部放牧です。羊もヤギも牛も馬もラクダも、彼らは野生なんです。そうすると馬に乗る、ラクダに乗る。ラクダに乗るなんて、ものすごく危険なことなのです。ラクダなんて、すごく気性の荒い時期のある動物です。おとなしいときは、すごくおとなしいのですけれども、すごく気

性が荒い時期があるのです。それらを簡単に言えば言うことを聞かせるというのは、本当に馬をバーッと殴り倒すなんていうより、ねじ伏せなければいけない。そのねじ伏せる力を持たなければ遊牧民をやっていけないのです。遊牧の根幹を支えているわけです。これがふだん酒を飲んでいても、モンゴルの女性たちは亭主の悪口は言うけれども、しようがないと認めている理由です。馬ならし、羊ならしのときに役に立つので、遊牧の根幹を支えているので黙認せざるを得ないのです。今のモンゴル社会の矛盾をなかなか解消できないとき、政策と現実の矛盾を何とかしようとしてうまくいかないときに使われている言いわけになっているのではないでしょうか。

以上が小生のモンゴル人の指導者に対する最近の嫌味です。それを皆さんにご紹介して、きょうの話のテーマとさせていただければありがたいということであります。

（了）